

ゆめ工房

Vol. 1

飛行機人間かグライダー人間か

◇ ちょっとおもしろいタイトルだとは思いませんか。これは、お茶の水女子大教授の^{とやま}外山^{しげひこ}滋比古氏の「思考の整理学（ちくま文庫）」の中に書かれていたことです。読んでいて、興味があったので、抜き出してみます。

ところで、学校の生徒は、先生と教科書にひっぱられて勉強する。自学自習という言葉こそあるけれども、独力で知識を得るのではない。いわばグライダーのようなものだ。自力では飛び上がることはできない。

グライダーと飛行機は遠くからみると、似ている。空を飛ぶのも同じで、グライダーが音もなく優雅に滑空しているさまは、飛行機よりもむしろ美しいくらいだ。ただ、悲しいかな、自力で飛ぶことができない。

学校はグライダー人間の訓練所である。飛行機人間はつぐらない。グライダーの練習に、エンジンのついた飛行機などがまじっていては迷惑する。危険だ。学校では、ひっぱられるままに、どこへでもついて行く従順さが尊重される。勝手に飛び上がったたりするのは規律違反。たちまちチェックされる。やがてそれぞれにグライダーらしくなって卒業する。

優等生はグライダーとして優秀なのである。飛べそうではないか、ひとつ飛んでみる、などと言われても困る。指導するものがあってのグライダーである。グライダーとして一流である学生が、卒業間際になって論文を書くことになる。これはこれまでの勉強といささか勝手が違う。何でも自由に自分の好きなことを書いてみよ、というのが論文である。グライダーは途方にくれる。突如としてこれまでとまるで違ったことを要求されても、できるわけがない。グライダーとして優秀な学生ほどあわてる。

いわゆる成績のいい学生ほど、この論文に手こずるようだ。言われた通りのことをするのは得意だが、自分で考えてテーマをもてと言われるのは苦手である。長年のグライダー訓練ではいつも必ずひっぱってくれるものがある。それに慣れると、自力飛行の力を失ってしまうのかもしれない。

人間には、グライダー能力と飛行機能力とがある。受動的に知識を得るのが前者、自分のグライダー能力をまったく欠いては、基本的な知識すら習得できない。何も知らないで、自力で飛ぼうとすれば、どんな事故にあうかわからない。しかし、現実には、グライダー能力が圧倒的で、飛行機能力はまるでない、という“優秀な”人間がたくさんいることも確かで、しかも、そういう人も“飛べる”という評価を受けているのである。

学校はグライダー人間をつくるには適しているが、飛行機人間を育てる努力はほんの少ししかしていない。学校教育が整備されてきたということは、ますますグライダー人間をふやす結果になった。お互いに似たようなグライダー人間になると、グライダーの

欠点を忘れてしまう。知的、知的と言っていれば、飛んでいるように錯覚する。我々は、花を観て枝葉を見ない。かりに枝葉は見ても幹には目を向けない。まして根のことは考えようもしない。とかく花という結果のみに目をうばわれて、根幹に思い及ばない。
(中略)

指導者がいて、目標がはっきりしているところではグライダー能力が高く評価されるけれども、新しい文化の創造では飛行機能力が不可欠である。それを学校教育はむしろ抑圧してきた。急にそれを伸ばそうとすれば、さまざまな困難がともなう。他方、現代は情報の社会である。グライダー人間をすっかりやめてしまうわけにもいかない。それなら、グライダーにエンジンを搭載するにはどうしたらいいのか、学校も社会もそれを考える必要がある。

「思考の整理学（ちくま文庫）」1986 から

◇ これが書かれた当時よりも、変化の激しい社会、予測のつかない社会になった今日、グライダー能力だけでは対処できない場面との出会いが予想されます。

人間を「教育されるべき存在」と決めていては、自力で飛行できる飛行機人間の育ちは望めそうにありません。これからは、大人も子どもも教えてくれることを待つのではなく、自らの手で学びを創りあげていこうとする意志や意欲、学び取って自らの世界を広げていけるのだという自信を身につけさせる必要があるのではないかと思った次第です。これが、今、文科省で議論されている「新しい教育」に求められる「資質や能力の育成」というものなのかなと思いました。

ここに書かれているように、誰もが生まれつき知的好奇心や知的欲求を持っているのですから、それを充足させるために大いに「学ぶ意欲」を発揮してほしいし、学ぶべきだと思います。そもそも学校で教えてくれる知識は、先人が手探りで、まさに手と足と頭と心で見つけ出し、体系化したものです。そう考えると、私たちが行わなければならない教育とは、子どもたちが様々な事象に対して能動的に働きかけ、自らが「学び」に取り組んでいけるように手助けしていく必要があるのではないかと思ったのです。

この考え方って、まさにアクティブ・ラーニングですね。授業づくりに、このような視点を取り入れてみることも大事なのかなと思いました。

文責：スギタ

この「思考の整理学」という本、大阪桐蔭高校の根尾選手が「愛読書」だと言ったことから、急に売り上げが伸びたそうです。